

レジュメ

この本よんだ？—小学校中高学年に向けて

白井 澄子

幼い頃には絵本の読み聞かせなどで本と親しむ機会があった子どもたちも、小学校の学年が上がるにつれて、本離れしてしまうことが多いようです。本を読むことは一種の人生経験だといえます。それは、読書によって自分の日常では体験できないような事柄に触れたり疑似体験できるからでしょう。子どもたちの視野を広げ、様々な感覚を磨いてくれる読書に出会うきっかけになるような本を紹介します。

きょうは、まず簡単に小学校中高学年の子どもの成長に触れ、次に、20 世紀半ばに起きた児童文学の変化（特にアメリカ）を概観した上で、テーマ別に本を紹介します。今回は、子どもにとって身近なテーマである〈家族〉〈友だち〉〈成長〉〈冒険〉〈動物と人間〉を取り上げました。（レジュメに記された書名直後の年代は初版出版年です。）

I. 10 歳の壁？

1. 10 歳前後の子どもたちについて（『子どもの「10 歳の壁」とは何か？』渡辺弥生）
2. 子どもの読書傾向

II. アメリカ 20 世紀前半の作品 v s 20 世紀後半以降の作品

アメリカの 1960-70 年代は児童文学の変化が顕著に表れる時代で、翻訳書が多い日本もその影響を受けています。明るく楽しい作品が書かれた 1960 年代以前の児童文学から、現実を反映した児童文学への変化、および子どもの描かれ方を概観します。

1. 20 世紀前半の児童文学—子どもが活躍する明るく楽しい物語
 - 『オズの魔法使い』（1900）フランク・ボーム
 - 『ひとまねこざる』（1947）H.A.レイ
 - 『エルマーのぼうけん』（1948）ルース・スタイルス・ガネット
 - 『がんばれヘンリーくん』（1950）ベバリー・クリアリー
2. 20 世紀後半以降の児童文学—タブーの崩壊と子どもの内面や悩みを描く物語
 - 『かいじゅうたちのいるところ』（1963）モーリス・センダック
 - 『クローディアの秘密』（1967）E.L.カニグズバーグ
 - 『ガラスの家族』（1978）キャサリン・パターソン
3. ヤングアダルト小説（YA 小説）の登場
 - 『チョコレート・ウォー』（1974）ロバート・コーミア

III. テーマにそって

1. 家族

- 『ふたりのロッチェ』(1949) エーリッヒ・ケストナー
『ヘンショーさんへの手紙』(1983) ベバライ・クリアリー
『お引越し』(1990) ひこ・田中
『ロボママ』(2003) エミリー・スミス

2. 友だち

- 『それいけズッコケ三人組』(1978) 那須正幹
『山賊のむすめローニャ』(1981) アストリッド・リンドグレーン
『みそっかすなんていわせない』(1989) ジャクリーン・ウィルソン
『夏の庭』(1992) 湯本香樹実
『ドレスを着た男子』(2008) デヴィッド・ウォリアムズ

3. 成長

- 『魔女ジェニファとわたし』(1967) E.L.カニグズバーグ
『魔女の宅急便』(1985) 角野栄子
『ハンサム・ガール』(1993) 佐藤多佳子
『西の魔女が死んだ』(1994) 梨木香歩

4. 冒険

- 『グリックの冒険』(1970) 斉藤敦夫
『モモ』(1973) ミヒャエル・エンデ
『秘密の島のニム』(1999) ウェンディー・オルー
『ケンスケの王国』(1999) マイケル・モーパーゴ

5. 動物と人間

- 『ロボーカランポーのオオカミ王』(1898) E.T.シートン
『ドリトル先生航海記』(1922) ヒュー・ロフティング
『シャーロットのおくりもの』(1952) E.B.ホワイト
『きいてほしいの、あたしのこと—ウィン・ディキシーのいた夏』(2000) ケイト・ディ
カミロ